

私の幼児教育論(三)

—個人的な家庭教育—

佐々木正美

愛の意味を追い求める子に

筆者はキリストによる福音を信じる者である。したがって、生活の規範や信条はキリスト教信仰に基づいている。「私の幼児教育論」は今回が最後であり、私自身のためのまとめにかえて、私の個人的な方法や経験を中心に述べてみたい。

キリスト者には、「自分を愛するように、隣り人を愛しなさい」という、生きることへの命題がある。私自身には、生涯どんなに努力して追求しても、実行することの不可能な命題である。そのため、生涯にわたって追い求める意味と価値があつて、その過程で、自分の罪深さを自覚し、聖書を読んで祈り、神にのみ自分の愚かさや罪深さをそっと打ち明けて、神の手による救済を乞う

ことになる。キリスト者が、真に心の安らぎを感じることできるのは、この体験の時である。

私はこの安らぎの体験の蓄積による「経験」を子どもたちに伝えたいと思つている。祈りの時とその後の私自身の安らぎは、七歳と五歳の息子たちにはもちろんのことだが、二歳になったばかりの一番下の息子にも、それなりに伝わるようである。

子どもたち自身の祈りといったら、クリスマスにはサンタクロースが、自分たちの願いどおりのプレゼントを持ってきてくれるようにといった内容のものが多いのだが、自分たちと親たちの祈りの内容のちがいは、日々自覚されていくようである。上の二人の子どもたちは、「神様に何を祈りしたの？」ということをし、私や妻にたずねることがしばしばあつて、自分たちの祈りの気持ちと比較しているようである。

だから、私たちが、聖書の教えを忠実に実行しようと努力すること、すなわち私たちの場合、そのことの困難さ(罪深さ)をより深く自覚することが、子どもたちの心の成長に深いかかわりをもつことになつていて、当然のことながら、親の心の成長が子どもの成長に先行していなければならないことになる。

「自分を愛するように、隣り人を愛する」ことへの「努力」の実践は、現在私たち夫婦が自分たちの子どもを教育する場合の目

標である。その努力目標の一部は、「自分の子どもを愛するよう
に、隣り人の子どもを愛する」ことにつながる。しかしこの努力
も同様に、実行しようとするほどの、そのことに對する自
分たちの困難さ、不可能さ、無力さ、罪深さを知るばかりであつ
て、そのために日常、聖書に接し、祈ることで神の救いによる安
らぎを得るといふ自覚と認識の経験を積み重ねるばかりである。

私たち夫婦は、こういう悩みと安らぎの自覚や体験を繰り返すこ
とで、子どもたちを教育しようとしている。私たちは、そういう
生きかた以外に、生きるための規範をもち合わせないのである。

私たち家族は以前、当時幼稚園の年少クラスに通う息子を中心
に、クラスの規則などを守らない仲間の問題を話題にしたことが
ある。その仲間は、クラスのだれよりも体格がよくて、けんかも
強いので、彼の傍若無人の行動に対して先生以外のものは無言で
いて、たしなめることができないような雰囲気があるという。

「ほくにスパーマンのような力があつたらな」というふうな
意味のことを、息子は当時子どもたちの間で人気のあつたテレビ
マンガの強い正義の味方の主人公の名をあげて言った。それでも
息子は、時々はどうにもがまんがならなくて、その強い仲間と衝
突してけんかとなり、必ず負かされて泣くという。顔に軽、じつ
かき傷をつくって帰ってくることも時々あつた。

そんな時私たち夫婦は、みんなできめた規則を守らない腕力の
強い仲間に、恐れずに向かつて行くこともそれなりに勇氣のいる
ことかも知れないが、それ以上に勇氣のいることは、クラスの弱
い仲間に親切にすることだといふようなことをよく言った。息子
はその意味をすぐには理解できないようであつた。

息子はクラスの中でいろんな仲間に恵まれたようである。運動
神経のすぐれたもの、動物飼育にくわしいもの、絵の上手なも
の、歌のうまいもの、大勢の仲間の中でリーダーシップを発揮で
きるものなど、さまざまな個性や能力の豊かな友だちに恵まれた
が、なかでも私たち夫婦は、軽い肢体不自由とやはり軽度のこと
ばなど精神機能に発達のおくれをもつたクラスメートを得たこと
に、真に感謝した。強い仲間の不正に立ち向かうことよりも、む
しろ弱い仲間に親切にすることの方が、どんなに困難で勇氣のい
ることかといふ、貴重な経験を与えてくれたのである。

クラスメートの多くは、何をやってもみんなよりおくれ、要領
の悪いその仲間を、なんとなくうとんじる傾向にあつたようで、
そういう仲間同士の雰囲気の中で、その仲間に親切にするという
ことは、本当に勇氣のない者にはできないことだといふ事実を、
私たちは息子に経験的に教えることができた。

息子がそう感じているクラス全体の雰囲気からして、その

仲間を声かけたり、靴をはいたり課題学習の遂行に手間どっているのを助けたりすることを、息子は当初、「恥ずかしい」という表現でできないと言った。「みんなが変に思うから」とか「ぼくも笑われるから」という言いかたで、息子は実行の困難なことを表現したりもした。そのたびに私たち夫婦は、やがてもっと大きな勇気が沸いてきたら、できる時がくるかも知れないと言って相槌を打った。

そして一週間に一度くらい、何かのついでに何気ない調子で「Aちゃんに親切ができた？」とたずねてみていたが、「まだ恥ずかしくてできない。だってだれもしないから」といった返事はかきかえられてきた。それが三カ月くらいするうちに、「勇気がまだできない」という言いかたをするようになった。それを聞いた上の息子が、「勇気ができないじゃなくて、勇気が出ないって言うんだよ」とその言葉づかいを正したりしたが、当の息子は「出ないじゃなくて、できない」だと自分の実感的な経験を言い張った。

その後さらに三カ月くらいしたある日、息子は息をはずませながら幼稚園から帰ってきて、母親に「とうとう勇気が出せた」と言ったそうである。Aちゃんが絵を書く時間にクレヨンをばらまいてしまったのを、すぐ近くに席のあった息子が席を立て、拾

うのを手伝ってやったというのである。そうしたらBちゃんやC君も手伝ってくれたと言って興奮気味であったという。

その夜帰宅した私を、いつもとちがって玄関に出迎えた息子は、やはり真っ先にそのことを報告した。彼は自分のやったささやかな行為に、自ら感動しているようであった。親としては、もっと軽い気持ちで期待していたはずだと思っていたその行為に、息子はひどく真剣にとりくんでいたのである。やはり私たち夫婦が、そういう行為を子どもたちに期待する態度に、やや強い印象があるのかも知れない。

感動し興奮する子どもに

やりたいと思っていながら容易にできなかったことが、自分でできた時の感動と興奮は、子どもたちが新しい自分を発見し確立していくための最大の原動力になるであろう。自転車に乗れた時、鉄棒で逆上がりが始めてできた時などの、あの感動である。だから、できたり発見したりすることに感動や興奮をとまなわなようなものは、できるだけ子どもの日常生活から排除してやりたいと思っている。あるいは、親として、どうしても子どもたちに期待したいことは、子どもたちの自尊心や意欲を傷つけたりすることになったりしない方法で、子どもたちが積極的にとりくむことの

できるような雰囲気や形で提示してやりたい。そういうやりかたで提示のできない場合には、そのことの期待はもっと後にまわすか、できるだけしないことにして、むしろ子どもたちの好きな遊びに耽^{ひた}ることができるようにおいてやりたい。本来子どもたちは、まったく自由な遊びの中にこそ、最も純粹な形で発見や感動や興奮を創造していく力もっているからである。

だから、しつけやその他の学習の課題を与える場合には、そのことに子どもたち自身が意欲的にとりくめて、成就した時には大きな感動を体験することができるような期待のしかたを心がけたい。子どもたちが、成長の発達に必要なとする経験は、こういう体験を通じてこそ積み重ねられると思う。例えば文字の学習は、それまで読んで聞かされてきた本を、自分でも好きなだけ自由に読んでみたいという願望をもった時に指導や援助がなされるべきだろう。私たちの外国語の勉強で成果の上があった場合のことを考えてみれば、よく理解ができれば、真に読みたいものや話したい気持ちがないままで学んだ、例えば単なる受験勉強のための外国語が、受験以外のことに役立つことはまれであり、しかも本人の真の創造的な感動や能力を、むしろ消耗させてしましさえする。たとえ小さな絵本にしろ、自分で読みたいという意欲から、読むことのできる感動に至るプロセスとしての文字の学習でありたい。

そういうプロセスが形成され得る諸条件がそろっていない場合には、幼児が体験し経験しなければならぬことは、かな文字の習得以外にいくらでもある。

この時期に、本当に楽しくてやりたいからやるという遊びなどの体験は、本質的には、親や教師に状況を用意してもらったり、指導されたりして可能になるものではない。子どもが自分自身で、あるいは仲間たちと共同して、そのことがやりたくて、胸いっぱい、頭いっぱい思いでそのことにとりくんで、新しい遊びのやりかたや、それまでに見たこともない現象や出くわしたことの新しい状況などを発見し、創造していくものにちがいない。そういう子どもたちが自分たちで自然に見つけてくる感動と、私たちが子どもたちに教えたい行為や行動の成功時の感動との間に、共通の要素的なものを多くつくってやるのが、私たち親としての重要な役割であると思っている。身ぶるいするような感動や興奮を、幼児期に、日常的に体験することのないまま成長してしまふということだけは、どんなことがあっても避けさせてやりたいと思う。

ある夏の早期、五時頃起きて、近所の人たちと森へ昆虫をとりに行き、デパートで売っているのと同じかぶと虫やくわがた虫を発見してつかまえて帰ってきた時の感激と興奮、飼っていたざり

がに子どもが生まれているのを発見した時のそれ、毎日新しいことを体験する仲間たちとの広場や林の中の遊びや、自分の家とちがった習慣を発見する仲間の家での遊びの楽しみ、こんな機会は幼児期から学童期のはじめにかけて、どんなに豊富に与えられても、与えられすぎになることはないと思う。

生命を尊ぶ子に

それから、自然というものに親しみと感動をもって接することができる子どもにしたいと思う。だから私は熱心に暇を見つけては、山や川や森や海へ子どもたちを連れて行く。そして家庭やその周辺では見ることでできない子どもたちの伸びやかで生き生きした行動を見ることで、私自身の最高のリクリエーションとしている。自然を相手にすると、子どもたちは目を輝かせ、全身に興奮を表現しながら、ほとんど休みなく終日にわたって活動する。草花や木や、鳥や魚や昆虫や、落葉、岩、石、土、水、それにさまざまな地形や場の雰囲気を手手にして、子どもたちは気どりのない名優や芸術家になる。そういう子どもたちを眺めているだけで、私には最高の心の安らぎが得られる。関西地方の山村で、小学校から高等学校までを過ごした私の少年時代も、毎日がそんなであったろうかと改めて考えたりする。

そして最後に、私は、子どもたちが何よりも生命を尊ぶ子どもになってほしいと思っている。本当に心の底から念願していることはこのことである。だから私たちは、小動物をあれこれ飼育している。幼児期の子どもでも、ちょっと意を用いれば簡単に飼うことのできる小さな生きものばかりを、親と子と、それに一緒に生活している私の両親（子どもたちの祖父母）も一緒に飼っている。雑種の犬が親と子の二匹、みどり亀、石亀、おかやどかり、さわがに、金魚、ふな、たなご、鯉、ざりがに、それにシリーズン中のかぶと虫とくわがた虫（現在は幼虫）、そのほか毎日出入りしている隣家の猫などがある。

私たちは、これらの小さな生きものたちに、できるだけ快適な生活環境を与えてやることを心がけている。だから私たちが意をつくす程度のことでは、飼育することで容易に生命を縮めてしまう恐れのあるものは飼わないことにしている。とんぼや蟬や蝶などは、子どもたちが珍しがって捕えても、すぐに逃がしてやる。そして、生命を縮めてしまうことのないようにという配慮であることを、よく説明してやる。

大事に飼っていた昆虫や魚が死んだ時は、庭の隅に手厚く葬ってやる。そして、美しい天国に行くことができますようにと、神へ小さな祈りをささげる。子どもたちは、自分たちが熱心に飼っ

ていた生きものだから、その時の祈りには、本当に心がこもっているのが、親の私たちにはよくわかる。そして神を信じ、神に祈ることで、大事に飼っていた小さな仲間安心して別れることができているようである。かれらは、美しい安らぎの世界に旅立って行く——。小さな魚や虫にも、一木一草にも、自分たちと同じ生命が流れているという感覚を、子どもたちが大事にしてくれたらと願っている。

神様のいる天国は、どんなに美しく素晴らしいところだろうと、子どもたちは夢をはせる。大切に飼っていた昆虫や金魚たちの行ったところであるから、そうあってほしいという願いがあった、やがてそう信じてしまっているようである。

生きているものが死んだら、みんな天国に行つて、美しく輝く星になる。象のように大きな動物たちは大きな星に、てんとう虫のような小さな生きものたちは小さな星に——幼稚園の年少組に通う息子は、そういう自分の空想を信じている。私たち夫婦がそうかも知れないと相槌を打つと、小学校へ入ったばかりの息子は半信半疑だという表情をしながら、否定はしなままでいる。天国へ行くことは信じているようであるが、星になるといふのはどうも変だと思っている。自分の持っている科学図鑑の宇宙の話と辻つまが合わない点を説明しかねている。

毎年クリスマス朝、枕元に発見する玩具のプレゼントを、幼稚園の息子は本当にサンタクロースが来て置いていってくれと信じており、小学校の息子は自分の両親が買ってくれたものだと知っている。それらの玩具を、サンタクロースは自分でつくるのだろうか、デパートで買ってくるのだろうかとモノロクしている弟のことを、兄は意味ありげな表情でにやにやしながら見つめていた。

たとえ昆虫の生命といえども、その虫にとってはかけがえのないものだから、大切にしようという気持ちを追求することと、天国や星やサンタクロースの世界の話に、素直な夢や思いをはせるといふことは、幼児の心の中で最も矛盾しなまま共存し得るものようである。

このような幼児の心の世界の体験や経験が、将来、子どもたち自身で「自分を愛するように、隣り人を愛する」ことを、生きることへの命題にして追い求めるための、小さな布石になってくれればという願いが、私たち夫婦にはある。

こんな心の世界を経験しながら、天気の良い日の日中は、戸外で膝小僧に生傷の絶えないような、活気のある遊びをしている子どもたちを、私たちは育ててみたいと思っている。

Ⅱ了Ⅱ

(神奈川県・小児療育相談センター 東京女子医科大学小児科)